

## 貞享期の朝幕関係 ― 京都所司代土屋政直を中心に ―

田中 暁龍

キーワード 近世朝幕関係 京都所司代 議奏 武家伝奏

### はじめに

近世朝幕関係史の研究は、近年多くの研究成果を蓄積し、その一つの成果として、近世朝廷が幕藩体制下で固有の政治的または宗教的な役割を担う構成要素として存続してきたことが明らかに<sup>(1)</sup>なった。

しかし、近世朝幕関係の時期的な変容を議論する際には、朝幕関係の事件や思想を過大に重視し、尊王論発達史を説く先行研究に対して、これをいかに克服していくかが一つの大きな課題とな<sup>(2)</sup>っている。<sup>(1)</sup>例えば、綱吉政権の対朝廷政策については、三上参次、辻善之助氏らが、大嘗会や賀茂祭の再興、歴代天皇の山陵修復などを挙げ、「綱吉の勤王」を強調する歴史像を提示している。<sup>(2)</sup>一方、武部敏夫氏は大嘗会再興の詳細な考察を行い、朝廷側の粘り強い交渉と儀制上の不備、公家の経済的負担を伴っ

て再興されたことを明らかにし、「綱吉の勤王」と結び付ける考  
え方の再検討を行った点が注目される。<sup>(3)</sup>

ところで、三上参次氏が、貞享三（一六八五）年十一月の所  
司代宛て老中連署の書状に着目し、「第一は御讓位後のことは  
関白・武家伝奏の二人にて沙汰あるべし。第二は大小の政事に  
上皇の御口入は御無用たるべし。第三は上皇御氣に入りの花山  
院前内大臣定誠は奸佞人なるにより、向後外様公卿とし、内謁  
は堅く御停止あるべしと。……然れども元来英氣勃勃たる上  
皇にましませば、いかで拱手せらるべき。遂に右の約を守られず、  
純然たる院政となれり。」と指摘している点は、冒頭に述べたよ  
うな研究上の問題を孕みながらも重要である。

三上氏の研究を再検討した久保貴子氏は、「天和年間には、天  
皇らの行動に対する表立った大きな反対の動きは朝廷内におい  
てもまだ乏しく、幕府においてはほとんど見られなかった。しか  
し、貞享年間に入ると、天皇の讓位をめぐって、幕府も天皇側

の動きに規制を加えるようになり、朝廷内でも天皇周辺に非難の目を向ける公家たちが増えていった。<sup>(5)</sup>と述べ、関白・武家伝奏、そして御側衆（のちの議奏）を含めた朝廷運営が指示されたことを指摘する一方、霊元「院政」にともなう朝廷内部の確執を明らかにしている。しかし、研究の重点が朝廷運営に置かれていたため、右の老中連署の書状を含めた、貞享期の江戸幕府の対朝廷政策が、朝幕関係史の上で、どのような意図や意義をもっていたかという点が十分に解明されていない面がある。

また、高埜利彦氏は、「院政」を指向した霊元天皇を中心に「朝廷復古」気運が存在し、幕府は「明正女帝が即位した際に、幕府が体制固めをした、それ以来の幕府の朝廷支配機構の再確認を、老中奉書で迫つ」て朝廷を抑え込み、朝儀復興や山陵修築で「平和時の將軍の權威を高めるために、天皇・朝廷の權威を將軍權力に協調させようとした」と指摘しているが、<sup>(6)</sup>貞享・元禄期の朝幕関係において、朝廷の制度的な課題がどの辺にあり、幕府がいかなる対朝廷政策を行ったか、もう少し詳細に分析を試みる必要があると考えられる。

そこで本稿では、貞享期に京都所司代に就任した土屋政直に焦点をあて、貞享期の幕府の対朝廷政策の意義を考察してみたと思う。

## 一 土屋政直の京都所司代就任

筆者は、かつて寛文・元禄期における公家（<sup>(7)</sup>）ではいわゆる三

位以上の公卿と四、五位の殿上人を中心にした）の処罰事例を、『公卿補任』『諸家伝』『地下家伝』『徳川実紀』『続史愚抄』、その他公家の古記録などから可能な限り抽出し、分析したことがある。<sup>(7)</sup>このデータをもとに、寛文・元禄期の処罰者の人数を年次的に追ってみると、全処罰者一〇八人の四八％（五二名）が天和・貞享期に集中している。また、公卿の処罰は、全処罰者の四二％（四六名）にものぼっており、当時の公家処罰が尋常なものでなかったことがうかがえる。<sup>(8)</sup>

天和期においては、霊元天皇の儲君をめぐる小倉事件が起っており、小倉実起の佐渡流罪のみならず、その縁故者の連坐などで多くの公家が閉門・逼塞等に処せられている。この小倉事件から七年も経った貞享四年、中院通茂は、「今度小倉左迂之義、甚以不可然、惣而上<sup>(9)</sup>御年弱、諸事御短慮<sup>(10)</sup>ニ御物荒、伝奏も氣短物荒、諸司代戸田山城守も氣短物荒、大樹<sup>(忠昌)</sup>も氣短<sup>(忠昌)</sup>ニ物荒候故、如此義出来候、以後かやうに候てハ、如何様之義出来可申哉、宜敷義ハ有間敷、諸事無覚束候由<sup>(9)</sup>」と述べ、天皇の短慮と、これを受けた所司代戸田忠昌や將軍徳川綱吉の短慮が小倉事件をひきおこし、これでは政務も覚束ないものだ<sup>(10)</sup>と天皇へ諫言を行った。これに対し、天皇が腹を立て、天皇の側近らが処罰への申請を行い、中院は出仕止の処罰を受けることになったのである。<sup>(10)</sup>

勿論、処罰の原因は、天皇・所司代・將軍の人格的特色のみに起因するものではなく、朝廷内の法度が確立し、諸制度の規律の厳格さが増す中で、当該期における公家の勤務不良や職務

上の失態などが処罰数増加の背景にあつたわけで、特に「行跡・素行不良」が処罰理由全体の四分の一を占めていることは、その特徴をよく表している。

深井雅海氏の研究によれば、天和・元禄期において、將軍権力を支えた旗本層に対する処罰が顕著に行われ、封建官僚機構の整備が目指されたとされるが<sup>31)</sup>、当該期の朝廷でも、賞罰厳命の方針が貫かれていたのである。筆者は、寛文期以降、禁裏小番の再編成が行われ、内々・外様小番に加えて近習小番が編成されたこと、議奏制が成立し、関白・武家伝奏と並ぶ朝廷統制機構が再構築されたこと、朝廷自らが禁中法度の整備を行ったこと、などの制度的変容を明らかにしてきたが<sup>32)</sup>、そうした朝廷内制度の整備が進む動きと並行して、天和・貞享期の公家処罰の急増という事態が生じたものと思われる。

霊元天皇の「院政」に向けた体制準備は、朝廷内に確執を生み出しただけでなく、幕府が基本方針とした、関白を中心とする朝廷政務に支障を生じたことは周知の通りである。<sup>33)</sup>天和三(一六八三)年、新武家伝奏に甘露寺方長が選ばれたが、関白一条兼輝は、その資質・能力を持たない人選であるにもかかわらず、天皇の意向に従い、その近臣である武家伝奏花山院定誠によつて人事が進められたと自らの日記に記している。<sup>34)</sup>この時期は、天皇とその寵愛する近臣の意向によつて政務が運営されていく事態となつていたのである。

さて、天和・貞享期に所司代に就任したのは、稲葉正通と土屋政直である。稲葉は、天和二年当時の公家の様子を「風俗不

正多端」ととらえ、特に、武家伝奏や天皇の近臣らに対する誹謗が多くみられることを問題視し、これを断固処罰していく意向を関白一条兼輝に伝えている。<sup>35)</sup>

天和三年七月二九日、稲葉正通宛て大老堀田正俊の書状が伝えられ、三か条の法度が武家伝奏から諸家に申し渡された。<sup>36)</sup>三か条のうち、第二条では武家伝奏による朝廷統制を明示し、第三条「実貞ニ而職業を励仁、又者常々行跡不宜輩於有之者、両伝奏より其方込被申聞尤之事」は、公家の家業、禁裏小番等の職務の励行や、不行跡の取締りを布達している。日付を見れば分かるように、三か条は、天和の武家諸法度直後に出されたもので、武家諸層のみならず、公家に対しても職務精励・風俗統制を触れた綱吉政権の基本方針が読み取れる。<sup>37)</sup>

貞享元年十一月、幕府は公家に対して「御当家御五代御由緒」と「武家江由緒有之公家衆」を書き付けて提出するよう命じており<sup>38)</sup>、綱吉政権は公武の人的関係の把握も行つていたことが確認できる。

貞享二年九月、稲葉の後任となつた土屋は、一〇月一六日に上洛の暇を給わり、その際に二通の勤方心得を老中連名で下された。二通のうち、朝廷を管掌することに言及した一通の勤方心得は前任者稲葉にも出されていたが、所司代の具体的な職務内容が心得書として老中から手交されたのは、綱吉政権下の稲葉・土屋の代のことで、それ以前は上方における緊急時の裁量権を簡潔に記す心得書が將軍家綱より渡されていた。<sup>39)</sup>すなわち、土屋が受けた心得の条目には、「禁中方江被附面々、御所方之御

作法諸事承候様可被申渡候事<sup>21)</sup>」と禁中御用が明記され、禁裏附を通じて禁中諸事を掌握するように命じられていたのである。寛文期以降、いわゆる京都町奉行体制が確立していく一方、所司代の禁中御用の職務が明文化されていく中で、土屋は、所司代の任に就いたのである。

一月七日に上洛した土屋は、一三日に参内し<sup>22)</sup>、二月一日、武家伝奏に対して、「一諸家中御奉公可為第一事、一諸事行跡正く、不長飲酒様三司被慎事、一人立所并惡所不被越様之事<sup>23)</sup>」の三か条を申し渡した。土屋は、綱吉政権の基本方針を具体化するように、京都に着任するや、奉公専一、長酒無用、惡所への立入禁止など、公家の風儀の取締まりを伝えたのである<sup>24)</sup>。

翌貞享三年六月四日、土屋は、御側衆の今出川公規と愛宕通福を自邸に呼び、奉公・勤務の事などを申し含めている。御側衆とは、寛文三（一六六三）年の靈元天皇即位時に後水尾法皇によって天皇養育係として設置され、寛文一一年の天皇・近習衆の放埒事件の際には、「御前之義」を掌握し、定時参番、宿小番勤務などが課せられる重職となり、延宝七（一六七九）年以後、幕府から四〇石の役料が出されて公儀の役人となり、貞享三年一二月七日靈元天皇によって「議奏」と改称された者たちである<sup>25)</sup>。六月六日、土屋は、御側衆の東園基量・勸修寺経慶を呼んで、朝廷内の様子を聴き取っている。それは、禁裏小番について、番所の位置や人数、勘定の担当者、酒盃の量がどの程度か、閑白・有栖川宮・花山院定誠が頻繁に祇候するか、天皇の歌学稽古・遊びの内容は何か、「出頭之人」は誰か、などの質問に及んだ<sup>26)</sup>。

右の質問内容から判断すると、土屋は、天皇と緊密に接触を行う者の人的把握をはじめ、朝廷内の動向の細部に注意を払い、小番勤務の状況や朝廷内で発言力を持つ者などを把握しようとしていたことがわかる。右の問答には、あとで天皇近臣の問題人物に挙がってくる有栖川宮・花山院定誠の名も見えることから、朝廷内のただならぬ状況を掴んだ上で、具体的に尋ねていたことがわかる。一方、御側衆の回答には、「御内儀之事不存候、於御表者、和歌御会等之時夜更候、其外ハ無之」「為指御遊も無之候」「明今為指出頭之輩無之候」と要領を得ぬものもあり、武家伝奏が多忙で掌握出来ない状況もあるので、御側衆が禁中諸事の掌握に勤めるよう土屋は促している。

すなわち、天和・貞享期における公家処罰の増加、靈元天皇と近臣による政務運営は、貞享期に入り、天皇の「院政」に向けた準備行動とあいまって、公儀の役人が「御前之義」を掌握しえない状況となり、幕府にとって新たな対策が迫られていたのである。

## 二 貞享三年末の所司代宛て老中奉書

本章で分析の対象とする、国文学研究資料館所蔵『自筆之書状下書<sup>27)</sup>』（以下、『書状』とする）は、所司代土屋政直が老中及び牧野成貞と往復した書状の下書や写しをまとめた記録である。この史料の全内容を、記載順（日付順）に表したものが表1である。

表1を見ると、各書状は、土屋政直が所司代に就いていた貞享三年一〇月二七日付から、老中に任命され後任の内藤重頼に引継ぎを行う翌四年一二月七日付まで、全一〇五件に及び、大概が土屋から大久保忠朝・阿部正武・戸田忠昌ら老中及び側用人の牧野成貞（老中格）<sup>28</sup>に宛てたものであったことがわかる。表向の政務に関わらなかったと考えられている牧野の名が見えることは大変興味深く、『書状』には、牧野を通じて將軍綱吉の意向が関わっていたことがうかがえる。書状は、月に五、六通程の割合で頻繁に作成され、「自筆」という記述も見られることから、直に書状の往復がなされたこともわかる（貞享四年一〇月の土屋の江戸在府期間は記録を欠く）。また、表1の内容は、ほとんどが当該期の朝廷に関わる内容となっており、語句の修正が散見されるものの、意図的な記述の改竄は認められない。この『書状』の記載する時期を考慮すれば、『書状』の内容を分析することで、所司代と老中及び牧野を通じて將軍綱吉がどんな意図で朝廷に対処し、いかなる経緯で貞享三年の老中連署の書状が出されたかが明らかにできるものと考えられる。ではまず、『書状』の記載が始まる貞享三年一〇月二七日付の一部を、以下に引用してみよう。

一前々御側衆五人ニ而被相勤候、一兩年以前、闕有之、今程四人ニ而候、就夫、<sup>（庭田中納言）</sup>庭田中納言可被召加思召之由、両卿被相達候、御側衆之儀ハ、前々々相窺不被申様ニ、被承及候得共、御手前上京以後、初而之儀候故、被申越候、庭田人物等之儀、被承届候処、律儀成仁ニ而、物每精ニ入被相勤候、別儀有之

間敷様ニ、両卿被申候、右之通被仰付候者、御側衆御役料四拾石被下候間、前々通可被下候、先日院參衆之通、両伝奏迄可被申渡哉之由、得其意候、前々々相定たる儀候間、被仰付候ハ、可被申渡候、

右記述では、欠員の出た御側衆（三条実通・愛宕通福・勸修寺経慶・東園基量。以下、議奏の称で記述する）人事が話題となっているが、土屋は武家伝奏（柳原資廉・千種有維）から得た、議奏候補の庭田重条の人物評を江戸へ知らせ、人事と役料支給の許可を武家伝奏に知らせていたことがわかる。もともと議奏の人事は、江戸へ伺いをたてなかったが、新所司代土屋にとつて初の人事ということで、江戸に伺いをたてたのである。すなわち、貞享三年一〇月、所司代が朝廷の議奏人事を江戸に知らせ、その承認を朝廷に伝えるという、内慮伺いがここに始まったことが確認できるのである。

寛文期の議奏の人事については、平井誠二氏が明らかにしているように、<sup>30</sup>後水尾法皇と武家伝奏が選定しているが、特に禁裏附前田直勝が、「替役、兩人被仰出之事如何、伊州窺江戸之事にもあらず、於仰者不可苦之由被申云々」と述べ、<sup>31</sup>人事について所司代が江戸に何う必要のないことを伝えている点が重要である。

延宝三年閏四月の議奏人事の場合も、武家伝奏は、「中老衆二三人先被借用可然歟」と述べ、<sup>32</sup>二名が選出されたか、<sup>33</sup>あくまで後水尾法皇と武家伝奏が中心となり人選を行っていたのである。しかし、その後天皇の成長にともない、延宝八年の法皇死



表1 『自筆之書状下書』における書状一覧（貞享3年～4年）

番	月 日	差 出 人	宛 先 人	主 な 内 容
貞享3年				
1	10月27日	戸田・阿部・大久保	土屋政直	「御側衆ニ庭田中納言可被召加思召之由」
2	11月7日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「庭田中納言事、可申渡由可得其意候」
3	(11月)7日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「大和守無事ニ罷有候段」
4	11月7日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「万事御作法・御用向ハ関白殿初撰家方・両伝奏・御側衆など被相動候」
5	11月16日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「東宮御元服之御日限并御即位之御治定も承度」
6	11月16日	土屋政直	戸田・阿部・大久保・牧野	「東宮御元服来正月下旬之内と被仰下候」
7	11月22日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「来年御即位以後大嘗会被行度思召」
8	11月22日	土屋政直	戸田・阿部・大久保・牧野	「御即位御用万端不案内、其御地与も早々御指図被遊候」
9	11月27日	戸田・阿部・大久保	土屋政直	「御讓位御受禪者三月、院之御料早御沙汰可然候」
10	11月28日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「門照寺宮附弟之義、鷹司前関白殿御息女御弟子被成度」
11	11月28日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「二条御蔵衆尾崎五右衛門事」
12	11月28日	土屋政直	戸田	「林丘寺宮後住之事」
13	12月3日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「近キ内ニも両卿をも招キ可申渡候、首尾次第御側衆をも相加申早ク申出候」
14	12月3日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「後西院女一宮日頃御病者ニ御座候」
15	12月7日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「大嘗会之義旧例之義ニ而諸色輕ク被遊御執行」
16	12月14日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「二条御蔵衆尾崎五右衛門事」
17	12月21日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「公方様益御機嫌能被為成」
18	12月21日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「後西院女一宮御願置之事」
19	12月21日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「此度御改被仰遣候」
20	12月25日	土屋政直	戸田・阿部・大久保・牧野	「公方様益御機嫌能被為成」
21	12月25日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「廿三日、両伝奏・議奏五人并修理・出雲も召加口上ニ而申達」
貞享4年				
22	正月3日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「旧冬十七日、紅葉山御宮廿御堂被遊御參詣」
23	正月9日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「当今物疑ヲ被遊候段益々及承候」
24	正月9日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「旧冬廿九日之御別紙着拜見仕」
25	正月16日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「御讓位之前、院御所江行幸之義」
26	正月25日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「花山院事一段之義」
27	正月29日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「御讓位以前、院之御所江行幸之義」
28	正月29日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「慈受院宮江被越候御合力米之御証文」
29	2月4日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「御即位之節、大嘗会被行候旧例之書付」
30	2月4日	(土屋政直)	阿部	「大嘗会之事、御讓位御受禪御即位之節」
31	2月9日	(土屋政直)	戸田・阿部	「去朔日之御別紙着拜見仕」
32	2月9日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「讓位以後、本院之御所と前後之唯之事」
33	2月9日	(土屋政直)	戸田	「讓位・即位相済候節、注進」
34	2月18日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「院附之事」
35	2月18日	土屋政直	阿部	「当年中參府仕度奉存候段、先延引仕可然思召」
36	2月25日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「岡部伯耆・山口老岐元屋敷之義」
37	2月25日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「御讓位以後、本院御所と前後之唯之事」
38	2月25日	土屋政直	阿部	「今度拝領仕候御屋敷」
39	2月25日	土屋政直	戸田	「即位之節、若私官位など御沙汰有之候共辞退」
40	3月朔日	土屋政直	戸田	「即位ニ付而、保科肥後守殿上使ニ被仰付候」
41	3月5日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「当今御讓位已後之御名之事」
42	3月9日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「御讓位御受禪之御使」
43	3月9日	土屋政直	阿部	「元御屋敷首尾能請取申大悦仕」
44	3月14日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「院伝奏東園・庭田事、院御所評定衆三人被仰付尤由御内慮」
45	3月18日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「御讓位・御即位之御用、議奏衆相加り動候」
46	3月21日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「東園・庭田兩人院伝奏ニ被仰付度」
47	3月21日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「御讓位御受禪相済候」
48	3月27日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「関白殿ヲ撰政ニ勅許之由」
49	4月朔日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「禁裏江向後仙洞御幸之事不入義、花山院事」
50	4月6日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「向後ハかろき事ニ而も少も替り候義ハ前廉ニ此方江御申聞」
51	4月6日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「一条殿撰政ニ勅許之事、是与輕き義をも関東江御届ケ被遊」
52	4月6日	柳原資廉	土屋政直	「院讓位之節撰政之詔之事」
53	4月6日	柳原資廉	土屋政直	「撰政之義委細書付令進候」
54	4月15日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「禁裏与被仰出候御條目、仙洞与禁裏御近習之面々被仰出候御條目」
55	4月15日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「女五宮并一条撰政殿江御使之事」

番	月 日	差 出 人	宛 先 人	主 な 内 容
56	4 月 28 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「勅使・院使下向之事」
57	4 月 28 日	土屋政直	阿部	「いき魚貝類料理、鷹之事、飼鳥之事」
58	5 月 2 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「女五宮江御使之事」
59	5 月 7 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「仙洞、御譲位以後御しつかニ御つゝしミ被遊候」
60	5 月 7 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「勅使・院使十六日ニ京都発足」
61	5 月 12 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「禁裏ニ而、今度御能御座候」
62	5 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「仙洞・本院、御幸之事」
63	5 月 18 日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「曲淵市太夫与力喧嘩仕」
64	5 月 23 日	(土屋政直)	阿部・大久保	「去十五日之御別紙拝見仕候」
65	6 月 2 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「於禁裏御能之事、紀伊殿太夫いまた上京不仕候」
66	6 月 5 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「仙洞本院御幸之事、本院与仙洞江御幸之義」
67	6 月 9 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「禁裏御能」
68	6 月 14 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「四人江方領」
69	6 月 21 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「公家衆ニ判形と申義ハ無御座候」
70	6 月 21 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「同性甲斐守義御役義被仰付」
71	6 月 28 日	土屋政直	戸田・阿部・大久保	「於禁裏、廿六日廿七日御能」
72	6 月 29 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「仙洞与先日御能之節、渋谷謡静ニ御聞被遊度」
73	7 月 7 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「同心并仕丁之儀、女院御所江御附被成候儀」
74	7 月 13 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「仙洞ニ而御囃子、去九日渋谷ニ被仰付」
75	7 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「禁裏江八朔之御祝儀」
76	7 月 26 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「久留嶋出雲守義、参府仕度由願申」
77	7 月 26 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「仙洞御所御内玄関之脇ニ而、牧下野守中小性乱心仕」
78	7 月 26 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「禁中御能之節、見物之者込合ふミはつされ」
79	7 月 26 日	(土屋政直)	阿部	「禁裏御能之節之様、委曲以利右衛門申上候」
80	8 月 2 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「松平主計頭、八朔之御祝義之御使被仰付」
81	8 月 7 日	(土屋政直)	阿部	「多武峯拝謝之事」
82	8 月 13 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「久留嶋出雲守参府願之義」
83	8 月 19 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「市岡左大夫事、本院附被仰附加増」
84	8 月 23 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「今日大嘗会之事初御座候由」
85	8 月 23 日	(土屋政直)	阿部	「今年御菱喰案本院・仙洞江ハ不被進候」
86	8 月 27 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「本院・仙洞江菱喰案被進候」
87	9 月 6 日	(土屋政直)	阿部・大久保	「女院御所与被召寄候趣」
88	9 月 6 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「御目付代太田善太夫・岡部久太郎、大坂江被罷越候」
89	9 月 13 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「院中惣而何方江御幸被遊候とも、日之内ニ還幸被遊可然思召候」
90	9 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「私義御用有之候間、参府可仕旨」
91	9 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「私留守中、御朱印前田安芸守ニ預ケ置指南義」
92	9 月 18 日	(土屋政直)	阿部	「今度参府仕、今度も直ニ貴宅江伺公」
93	9 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「発足ハ廿七被頃ニ罷立」
94	9 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「廿七八日頃ニ発足仕」
95	9 月 26 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「女手形之事」
96	9 月 26 日	(土屋政直)	阿部	「廿一日廿五日、本院・女院江何候候」
97	9 月 27 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「今般発足仕候、継飛脚相立候」
98	11 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「一昨十六日之夜大嘗会」
99	11 月 18 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「本院御所、御願之通被下屋敷」
100	11 月 23 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「須田市兵衛義禁裏附被仰付」
101	(11 月)	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「手前一物之事」
102	(11 月)27 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保	「内藤大和守上京、私義も参対話」
103	11 月 27 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「大和守登城之節、溜り迄毎度御呼出シ」
104	12 月 2 か 3 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「今日内藤大和守参内院参被致、私義仙洞与御暇被下候」
105	12 月 7 日	(土屋政直)	戸田・阿部・大久保・牧野	「私義去四日、禁裏与首尾よく御暇被下品々拝領仕」

注 1) 人名については記載がなくても、判断されるものはカッコ（ ）内に記した。

注 2) 戸田：戸田忠昌、阿部：阿部正武、大久保：大久保忠朝、牧野：牧野成貞、柳原資廉は武家伝奏

去後は、天皇自身の意向が人事に反映した。例えば、一章で言及したように、天皇の「御臚被遊」近習の一人、甘露寺方長が、延宝八年三月三歳で議奏、天和三年十一月三六歳で武家伝奏に就任したのである。<sup>34)</sup> いずれにしろ、寛文・延宝期において、議奏の人事が江戸まで伝えられ、承認を得る内慮伺いの手続きはなかつたことがわかる。

平井氏は、元禄期以降、議奏の任免に幕府側の意向が反映されていくとするが、貞享三年一〇月の土屋の報告・承認の手続きの意味は大きく、これ以後、所司代が朝廷内の役人人事を江戸に伝え承認を得る、内慮伺いが慣例化していったのである。この手続きは議奏に止まらず、武家伝奏の人事においても、同様な手続きとなつたと考えられる。

では次に、『書状』十一月七日付を引用してみよう。

一去頃、<sup>(牧野成貞)</sup>備後守殿迄指越申書付之趣、何も様御被見被成候、<sup>(花山院定通)</sup>花山院殿事、<sup>(一条兼卿)</sup>関白殿被仰聞候趣、且又独々之取沙汰之趣も申進候処、花山院事、内々不宜様ニ、其元ニ而も御聞及被成候、<sup>(御仁親王)</sup>東宮御即位之砌、花山院事、御後見被指出、清花之大臣並ニ出仕等も被仕、万事御作法・御用向ハ、関白殿初撰家方・両伝奏・御側衆など被相勤候様ニ、可然思召候間、<sup>二</sup>関白殿御宅ニ而、<sup>一</sup>両伝奏へも私出合、花山院義、江戸向之沙汰も不可然相聞候と、私心得之様ニ申達候而ハ、如何可有之候哉、各様思召寄被仰下候趣、奉得其意候、乍去申上候通、花山院事、殊之外御前向にて候由御座候間、私心得之様ニ、<sup>候</sup>申上候て分ニ而ハ、事も軽ク禁裏思召<sup>御承引</sup>もうすく御座候而ハ、

せんなき義ニ御座候間、東宮御後見之義ハ不及申、院御所江も御用向之義ハ、構不被申候様ニと、諸国大臣並ニ、諸事被致候様ニと、各様私方迄被仰下候旨、少々者、其御状関白殿・両卿などへも入被見申之程ニ仕度候、左候ハ、事も重ク此義ニかきらす、諸事其御地へも諸事きこる申と御座候ハ、禁裏ヲ初公家衆迄、万事之つゝ、シミニ罷成可有哉と奉存候、如御意おそかぬ義候間、弥被逐御相談、御讓位前時分ニも申渡候様ニ可然候哉、とかく其御地へ急度被仰下候様ニ致度候、<sup>是</sup>左候得ハ、<sup>おもきことニ而</sup>事も重ク可然奉存候、<sup>御座候</sup>花山院除被申候得者、重畳之義と大慶奉存候、

一禁中ニ而、今程対御為存入候而勤被申候公家衆無之、御勝手向之義、しまり不申様ニ被為聞候、<sup>(佐野正行・久留島通貞)</sup>尤修理・出雲御贈等之義申付候ても、御側向之衆しかと無之候て者、万事ニ付、宜ク間敷と思召候間、東宮御即位之砌、両伝奏と御側向之衆、弥被申談御ついへ成義無之様ニ、被相斗候様ニと急度申達候ハ、可然思召候了簡之通、無遠慮可申上由、奉得其意候、存寄候義、遠慮可仕哉も無御座、殊被仰下候上ハ、猶以少も遠慮不仕候、

一此義ハ修理・出雲などへも有了簡相談仕置候、御即位以後ハ、御側向之事ヲ承衆之内、相応成ヲ一兩人も相定、御勝手向御贈等之御用も身ニ引請、修理・出雲と諸事被申談被致吟味候ハ、御ついゑも無之、しまり可申候、弥相談仕、右之通ニ可致と奉存候、たゞ今迄右様之分て身ニうけ被勤候役人も無御座候故、しまり不申由候、尤其上ニ伝奏衆・御側



衆へも急度可申渡と奉存候、あれこれ申分ニ而ハ、投たりニ可罷成候、

一東宮御即位以後ハ、何とそ各別わけも御座候義ハ、各別諸事院御所<sup>ト</sup>御指引無御座候様ニ、是ヲ第一ニ仕度候、御幼年ニ付、当今之御まねヲ不被遊候様ニ仕度候、拟御用向・御作法之義ハ、関白殿・両伝奏相談之上、私へも御申聞候様ニ仕候ハ、御作法もよく事もしまり可申と、可有御座候哉と、奉存候間、此義も弥被遂御相談、其御地<sup>ト</sup>私迄江被仰下候様ニ仕度候、并

一其外女中、其外独々<sup>ト</sup>一切諸事指出無之様ニ仕度候、

一私存寄候御作法并御勝手向之義なとも、両伝奏迄ハ数度申上候得共、両卿へも諸事あぶなかり被申、委細ニハ被達御耳兼候と、相聞え申候、先頃ハ御側衆をも招、存寄之段々も申達候得共、諸事此方存候様ニ無御座、氣之毒ニ奉存候、……

右の記述によれば、天皇の寵愛する花山院定誠を東宮（のちの東山天皇）後見より除き、天皇の讓位後の口出しを無用とすること、朝廷政務を関白はじめ摂家衆・武家伝奏・議奏とで取り仕切ることに、女中からの口出しも一切無いようにすることを申し渡すに当たり、「御前向」という天皇の意志決定に関わることなので、それが土屋の判断で行うのは「事も軽く」「禁裏御承引もうすく」なると予想され、江戸からの書状を関白・武家伝奏に見せ、幕府権威をもつて伝達したい旨などを要請したのである。加えて、これを機に朝廷の諸事が改まり、天皇をはじめ

公家衆が「万事之つゝしミニ相成」よう、朝廷内の風儀を一新するねらいがあつたこともわかる。土屋としては、武家伝奏に朝廷政務の問題点を絶えず説いてきたが、天皇の意志決定を幕府の意向に添わせることができず、役人らの意識変革をも迫る必要性を考えていたのである。また、今後、即位・讓位に関わる出費が予想され、禁裏の支出増大や議奏の人材不足を問題としていたこと、天皇の代替わりを機に、武家伝奏と議奏による円滑な運営と、議奏から「御勝手向御賄等之御用」を担当する者を選び、禁裏附等と相談して支出削減を行うこと、などの見解が示されている。幕府としては、天皇の意思決定に直接関与できなかつたわけで、そうした天皇の意志決定にいかに関与し、幕府の意向と調整できるかが、貞享期における朝幕間の大きな課題となつていたわけで、議奏の重要性が再認識されたことが注目される<sup>35</sup>。

貞享三年末の時点で、土屋は議奏の人事に気を遣い、武家伝奏・議奏が所司代と諮って円滑な政務運営を行つていくことをねらい、江戸からの書状を要請したのである。つまり、三上参次氏が言及した、所司代宛て老中連署の書状が出された背景には、靈元院の「院政」が予想され、それを抑えようとした土屋が、老中及び將軍の権威を背景に、朝廷政務や経済向きを含めた諸改革を行う意図があつたのである。

『書状』二月七日付の土屋の要請を受けて、老中と牧野成貞による自筆の書状が二月二三日付で発せられるが、ここで土屋政直は躊躇する。『書状』二月七日付には、「先御下候御別昏之趣、

近キ内ニも可申渡哉と奉存候処ニ、能被思案仕候得ハ、花山院殿事、其外之義ハ、早ク申達候方可然奉存候得共、御讓位以後、禁裏御指引不被遊候様ニとの義ハ、御讓位前頃<sup>申達候</sup>被仰下候様ニ仕度候、花山院殿事斗ニ而も御機嫌よく御座あるましく候、其上ニ御讓位以後、御指引無之様ニとの御事、旁御ふたれ被成諸事御こたわり被遊候ハ、御讓位前之御用とも相滞、万端無覺束、下々迄之迷惑ニも可有御座候……此節其御地御用多可有御座候間、申上候も遠慮ニ存候得共、此上何之事もなく御讓位・御即位とも、首尾よく事済申候様ニと奉存候、付、重而存念之趣申上候、右之段尤もニ被思召候ハ、此御ケ条ハ被指除、其外之義御書直シ被下候様ニ仕度候、御状参候ハ、追付見合可申渡候、依之取前之御状ハ返進仕候」と記されている。土屋は、花山院の排除、靈元院の口出し無用を伝える場合、前者は問題ないが、後者は事態が紛糾し、讓位直前に通達した方がよく、後者の条項を除いた書状を改めて江戸より送つてほしいとの申し出をしていたのである。ここには、靈元天皇の機嫌を損ねずに、かつ幕府の意向を円滑に進めようとする、まさに朝幕間の調整役ともなった土屋の立場がうかがえる。

しかし、結局、『書状』一二月二一日付に記される江戸からの回答は、土屋の申し入れに反して、天皇の意向と異なつても、朝廷政務の枠組みは正しく伝えられるべきであるというものであった。そこで、『書状』一二月二一日付を次に引用してみよう。一先日被指越候御別番ニ被仰下候、然者、私存寄候段申上候処、各様思召候とは、私了簡相違ニ御思召候、主上思召ニ不相

付とても、御作法ニ宜義者、各別之御事候間、弥申奉可然思召候、惣而其御地<sup>ハ</sup>被仰越候義ハ、御用被遊候様ニ、兼々仕向可然候、御機嫌之程ヲかねいかゝと不存、あやふミ無之、御仕置・御作法つくの義ハ、少々さゝくり候とも、急度相達候様ニ相心得、其御地江相伺可然事は早速申上、又左程ニ無之候義ハ、自分了簡ニ而も申達可然思召候、右之通ニ付、取前之御状又被遣請取申、且又張番ニ相調申上候趣、一入難御心得候、此度ニかきらす、堂上方諸事之善悪は、使之度々ニ相知レ候様ニ、つね／＼仕成專要ニ思召候処、此度御改被仰遣候事、かる／＼敷外之事へも通シ申間、ケ様之所御仕置之第一と被思召候段、一々御尤至極奉存候、私義も兼々成ほと其心得ニ而罷在、左様ニ仕存し申候得とも、今度之義ハ、私不了簡ニ而わる念ヲ入過シ申候、近頃思召之段迷惑仕候、か様ニ被指置候上ハ、以御威光指当候義、又ハ輕キ義ハ心一はいニ取はからい申候、尤氣立候義又ハ、おはからさる義其外了簡ニも難及義ハ、奉得御指図事ニ御座候、……今度之義ハ、此方<sup>ハ</sup>願候而申上、其御地<sup>ハ</sup>被仰下候義ニ而御座候得者、猶以あやふミ輕ク申義ニ而ハ無御座候得共、前後二段ニ仕候而は、如何可有御座哉と窺申事候、此段不入念ニ而御座候、

右の記述に示されるように、江戸からは、申渡しによつて天皇の機嫌を損ねないか危ぶむ向きがあろうとも、少々朝幕間の緊張が高まろうとも、院の介入無用の方針を伝えることが大切だと伝えてきており、土屋は反省の弁を述べて自己の考えを翻

している。右記述の後には、土屋が幕府の権威を背景に当初の方針で対処していくことを決断し、今後自己にふりかかる朝廷内外の評判に対しては意に介さず、断固として対処していくという強い意志を文面に表わしている。

そして二月二三日、関白邸に所司代・禁裏附・武家伝奏・議奏らが集まり、土屋が懷中から江戸の書状を披露したのである。<sup>36)</sup>『書状』二月二五日付には、関白が花山院の事はすぐに申し渡すことができるが、院の介入無用に関しては遠慮せざるをえないと回答を行うのに対して、土屋は遠慮無く申し渡すこと、本文の筆跡は大久保忠朝のもので、老中銘々が自筆で名乗り、「物而氣立候御用之義候」と説き、武家伝奏柳原がこれを写しとっている。こののち、『書状』貞享四年正月九日付からは、関白・武家伝奏・所司代が一体となつて院の介入無用を行つたと天皇が疑い、困っている<sup>37)</sup>と武家伝奏が申し出ていたことがわかる。そして土屋が、「とくと御納得被成、向後万事御つゝしミ可被遊」と念押しし、花山院と昵懇の有栖川宮・醍醐冬基・土御門泰らの動向に注意するよう、武家伝奏に申し含めたこともわかる。

ただし、院の介入の件については、武家伝奏・議奏らの蟄居を覚悟した嘆願が功を奏して、結局、官位など朝廷の重要政務については靈元院の意見を聴くということで合意し、朝廷側にやや押し切られた感が否めない<sup>38)</sup>。ここには、朝廷と最前線で渡り合う所司代の現場感覚が左右したものと思われ、幕府の許容範囲で朝廷側役人の統制をすすめる一方、幕府が朝廷内制度を運用しつつ、天皇の意志決定を調整するという限界も垣間見える。

さて、『書状』三月二七日付には、「去廿二日、一条関白殿<sup>39)</sup>使者御越、昨日摂政ニ 勅許被下由御申越候付、柳原方江申遣候ハ、関白殿ヲ摂政ニ 勅許之由御申越候、おそき事ニ御座候、関東へも御相談ハ無御座義候哉、ケ様之前々例も可有之候、不案内之事ニ候様子承度由申遣候得者、如此被申越候、関白・摂政指而替り候義も無御座、御幼主之時ハ摂政、御成長之後ハ関白ニ而御座候由候、柳原<sup>40)</sup>之状入御披見申候」と記され、三月二日靈元天皇の讓位、一〇歳の東山天皇の即位に伴い、関白一条兼輝が摂政となつたことについて、事前に幕府へ相談がなかつたことの問題性を、土屋は武家伝奏に問い糾している。<sup>39)</sup>『書状』四月六日付では、「向後ハかろき事ニ而も、少も替り候義ハ、前廉ニ此方江御申聞様ニと申達候」、別の『書状』四月六日付にも、「堂上方之事ニハ、摂政々重キ義ハ御座有間敷候ニ、とかくの御沙汰も無御座候段ハ、か様之子細ニ而候哉、重而様子承度候」と、天皇の内慮や朝廷内の動向について、事前に所司代へ相談あるべきこと、摂政の件は特に重大なこと（朝廷統制の要）だとする幕府の姿勢を伝え、柳原からの書状二通とともに江戸へ送付している。

以上のように、天和・貞享期における「行跡・素行不良」等による公家処罰の増加、靈元天皇と近臣による政務運営、さらには天皇の「院政」への準備動向などに直面した所司代土屋政直は、江戸の老中及び將軍の権威を背景に事態解決に当たつたのである。それは天皇をはじめ公家衆に至るまで「万事之つゝしミニ相成」ように、朝廷支出の削減を含め、朝廷風儀を一新

するねらいがあり、①靈元上皇の口入れを排除する指示を行い、関白・武家伝奏ら朝廷統制機構に議奏を加え、天皇の意思決定に公儀の役人が関与し、近世初期からの統制機構の枠組みを維持・補強しようとしたこと、②議奏の役割を重視し、その人事に注意を払い、かつ江戸へ内慮伺いを行う手続きをしたこと（『書状』三月一四日付によれば、院伝奏・評定衆の人事も同様に、江戸に内慮伺いを伝えて承認を得ていた）、③天皇の内慮や朝廷内の様々な動向・変化を、武家伝奏が所司代へ伝え、承認を得る手続きを踏むように指示したこと、などの措置が図られたのである。

### 三 讓位後の朝廷と土屋政直

その後、元禄四（一六九一）年に所司代が再度禁中への介入排除を伝えるが、靈元上皇による「院政」は、元禄六年まで継続する。靈元上皇の「院政」に関しては、先行研究により、院伝奏設置に伴い議奏勸修寺経慶が自己の役料を供出していたこと、讓位時の靈元上皇は議奏が院伝奏を兼務することを意図していたが、それは叶わなかったこと、議奏が院と禁裏を結ぶ性格をもっていたこと、東山天皇の近習衆の筆頭格として「四人衆」（今出川伊季・正親町公通・河鱈実陳・池尻勝房）が設けられたこと、などが明らかにされている<sup>（和）</sup>。

讓位後の『書状』五月七日付には、「<sup>（東山天皇）</sup>当今ハ御生付御静ニ御読書等も被成、一段宜之由御申候、御作法もよく御座候……」

<sup>（靈元上皇）</sup>仙洞ニも兼而存候様ニ無御座、御讓位以後、御しつかニ御つゝしミ被遊候由ニ御座候」と記され、土屋は、貞享三年末に起きた朝幕間の緊張関係が一段落し、天皇・上皇双方に問題がないとの認識を江戸に伝えていた。

しかし、現実の朝廷では、大嘗会という一大行事を控え、靈元院による様々な指示が公家衆に対して出されていたのであり、幕府は、その許容範囲を逸脱する状況に対しては、措置を講じる必要があった。

例えば、靈元上皇の「院政」下にあつて、議奏が禁中への参番とともに、院への祇候を行う状況が日常化し、議奏本来の職務に支障をきたす事態になっていたのである。貞享四年一〇月四日、江戸へ向かう土屋が申し置いた言葉を記す勸修寺経慶の日記には、「議奏輩、自今已後、省中不明様ニ可相詰、若 仙洞へ祇候之刻、非番輩参勤、其内相勤可申旨也、仙洞御気色者、議奏輩者、御用多相勤候間、朝間又宿前休息、或ハ 仙洞へ祇候之刻者、幸四人衆不明相詰候間、替可仕候旨 仰也、雖然武家伝奏・議奏外之下知者、不承候間、四人衆替ニ者、難成旨強申、仍如此從辰至翌日辰参番相替、又加勢一人宛從昼過参勤申也、是從武家役料請候故也、予当春指上申、一粒も不請、雖然議奏之列故、如是相詰也<sup>（和）</sup>」と記されている。すなわち、今後議奏は、院へ祇候する場合には、非番の者が必ず禁中にも参番し、議奏相役の中で融通をつけて禁裏御用には明きを生じることがないようにと土屋は申し置いていたのである。上皇は、議奏が院に祇候する場合、天皇に付けた「四人衆」が禁裏に詰め議奏の替わりをす



るように考えていたが、土屋は、「四人衆」には武家伝奏・議奏と同様な、幕府との連絡役を勤めることはできないと伝え、議奏が複数交替制で参番し、一人が加勢に入ることを指示したのである。議奏が幕府から役料を得る公儀の役人であり、禁中の掌握という幕府の意向に叶う勤務を行う必要があることを、記主である議奏の勅修寺自身がよく認識していたのである<sup>(43)</sup>。

また、貞享四年一〇月末、靈元上皇が大嘗会の際に二夜にわたり禁中へ逗留したいとの意向が土屋へ申し入れられるが、土屋は上皇の逗留を断る<sup>(44)</sup>。これに対して、議奏・武家伝奏らは上皇の逆鱗を予想し、寒気が体に障るから夜中に還幸した方がよいという奏聞を行い、これを上皇が了承したことで事が収まっている。

このように、土屋は議奏を、(上皇が構想した)禁中・院中の御用を掌る職制的位置づけから禁中御用を掌る本来の職制的位置づけに修正を行い、そして武家伝奏・議奏ら役人は、幕府の許容範囲に沿って奏聞を行い、現実的な調整を行っていたことが認められるのである。

土屋は、同年一〇月に所司代から老中へと転任するが(享保三年まで老中在任)、後任の内藤重頼に引き継ぐ段階で、土屋のことが公家によつて、「予父子・梅溪三位<sup>(英通)</sup>・水無瀬三位<sup>(兼豊)</sup>・堤権佐等同道、向土屋相州、向予懇意挨拶等也、…相州申云、諸家行跡善悪委細存之間、於関東令言上候、今度内藤大和守替役罷登、是にても委細被含之間、御慎可然之由、急度演説云々<sup>(45)</sup>」と書き留められている。すなわち、土屋は、公家の動向の諸事を

江戸へ通知してきたこと、自分が行ってきた風儀取締りの方針を、後任の内藤重頼に引き継ぐので、言動を慎むようにと語っていたのである。このように、公家の風儀を取り締まる土屋の方針は、後任者へと引き継がれたと考えられる。

元禄二年四月、暮六ツ以後の女房たちの禁中出入禁止に対して、門番の取り次ぎで許可を行う院と同様、禁中の出入を自由にしたいとの靈天上皇の院宣が出され、議奏勅修寺は禁裏附須田盛輔と交渉を始めるが、結局、次のような判断を行って、院の意向を思い止まらせている。

大隅守ニ対面、御門事、大和守談申候処、猶勘へ申御返事可申旨可申由申候、事外腹立、相模守相定置候、先役人之義一身改候事如何之由、又大隅守も他人<sup>(虫損)</sup>違於関東此御役儀□勤申、能様子乍存知風、御請申哉之由、甚令勘発候由申云々、同然也、已後愛宕三人出逢候処、同然也、仍参院於御前段々申上候処、然義大典侍・大乳・大和等斗ハ成間敷坎之由仰、予申云、兎角惣而之義申躰ニ而強而於仰出者、定而関東へ達可申候、然者、例之相模守又何事坎、此儀ニ相添可申越も不存候、却而他妨ニも可成候間、御返事不申已前ニ、從此方被止由可被仰聞之旨申処、然者其通可申旨仰也<sup>(46)</sup>。

禁裏附の煮え切らない回答に腹を立てる勅修寺だが、朝廷側が幕府に対して強い申し入れを行った場合には、所司代内藤重頼は結局、江戸に伺いを立て、老中の土屋がこの件以外にも何かと制限を加えてくるのではないかと推測し、自重したのである。



このように、土屋の行った措置の意味は決して小さいものではなく、かつ江戸の老中となつてなお、朝幕間において役割を果たす存在として受けとめられていたことが認められるのである。

ここで、元禄期の議奏・武家伝奏の人事について、先行研究<sup>74)</sup>を踏まえて整理をしておこう。元禄五年二月、武家伝奏柳原資廉は、所司代小笠原長重と議奏人事について対談し、上皇の選定によらず、関白（近衛基熙）以下の相談で決定すること、朝廷の公事に精通し、行跡も宜き人物を五、六人選び小笠原まで報告することを述べている<sup>48)</sup>。しかし、議奏の人事については、その後評議が長引き、翌元禄六年七月、所司代の催促をうけて再び評議が行われる。その際、関白は、上皇・天皇と連絡をとり、天皇が三人の候補を選出し<sup>49)</sup>、これに対して関白は、「議奏之事者、関東へ有御相談之上、御治定之事也」と述べ、もし幕府の意向にこの三人が添わないことがあつてはまずいので、もう二、三人を選ぶよう天皇に申し入れ<sup>50)</sup>、関白は、三人の選定の承認を上皇から得て幕府へ内慮伺いがなされ、承認が得られたのである。

一方、元禄五年の武家伝奏の人事は朝廷より候補者をあげて幕府が選定しており、同六年八月の武家伝奏人事では、勧修寺経慶が「持明院前中納言所労之間、被免御役、跡役正親町中納言可被仰付候旨、從関東申来候由申渡候、仍參 仙洞へも言上候、……參 御前、此儀如何、押而関東沙汰不叶御心、叡慮不快御気色也、兩人申之、御尤存候、乍去當時武威難被押、其上伝奏之儀者、從上被仰出、又者從其仁頼而令沙汰候義、兩様ニ候、兎角此上者、任彼趣申渡候様ニ可被仰出哉旨言上候処、其通可申由

被仰出<sup>51)</sup>」と記し、天皇・上皇の意向に反して正親町公通が幕府の指名によつて決定されたのである<sup>32)</sup>。

このように、議奏・武家伝奏の人事は、土屋のとつた措置が継承され、関白を中心に朝廷統制機構による選定がなされた後、内慮伺いの手続きがとられて、最終的に幕府の承認が重視されていたのである。

### おわりに

將軍綱吉は、天和三年の武家諸法度発布直後、禁中への法度三条を出し、武家伝奏による朝廷統制のほか、職務精勵・風俗統制の方針を打ち出した。また、京都町奉行制の確立に伴つて所司代の職務分掌がすみ、土屋政直の所司代就任時の勤方心得には禁中御用が明文化され、土屋は就任早々に公家の風儀を取り締まる法度を伝えた。

天和・貞享期の朝廷の動向に対して、土屋は、江戸の老中及び將軍の權威を背景に、朝廷支出の削減を含め、朝廷風儀を一新することをねらつて対処した。そこでは、幕府が「院政」を志向する靈元天皇の意思決定に直接関与できない中で、天皇が果たすべき本来の務めや禁中「御作法」が正しく行われるか、天皇の意志決定を幕府の意向に沿う調整ができるか、などが貞享期の朝幕間の大きな課題となつていた。

そして土屋は、①靈元上皇の口入れを排除する指示を行い、関白及び摂家衆・武家伝奏ら朝廷統制機構に議奏を位置づけ、

天皇の意思決定に公儀の役人が関わり、「御前向」を管轄し、天皇と幕府の意志決定とを摺り合わせることで、近世初期からの統制機構の枠組みを維持・補強しようとしたこと、②議奏の役割を重視し、その人事については、従来、朝廷のみで諮られていたことを変更し、江戸に内慮伺いを行って承認を得たこと、③武家伝奏に対して、天皇の内慮や朝廷内の様々な動向・変化を所司代に伝え、承認を得る手続きを踏むように指示したこと、④上皇の「院政」にともない、議奏が院の御用を掌る職制的位置づけとなっていた状況に対して、禁中御用を掌る本来の職制的位置づけに修正を行ったこと、などの措置をとった。

これら土屋の措置は、元禄期以降の朝幕関係のあり方にも影響を与えた。右の②・③の措置は、元禄期の武家伝奏・議奏の人事において、天皇・上皇の意向を踏まえ、関白ら朝廷統制機構によって人選されただけでなく、最終的に幕府の承認が重視されるようになったのである。こうした役人人事の内慮伺いは慣例化し、江戸後期においても制度的に定着していったことが先行研究によって明らかにされている。<sup>353</sup>すなわち、土屋の政策は、朝廷内の役人人事や政務に関して、内慮伺いという近世朝幕関係上の基本ルールを確認し、ここに手続き上の基本的な枠組みが慣例化していくという大きな意義をもったのである。

一方、右の①の措置は、院の意志の発動そのものが完全に否定されなかった結果、少なくとも元禄六年末までは、院の口出しや天皇家外戚の干渉が絶えず関白を中心とした朝廷運営に困難を生じることにもなった。そもそも、武家伝奏・議奏ら公家が

公儀の役人として位置づけられたものの、天皇・上皇との意志決定の調整に当たること自体、制度的な矛盾を内包していたわけで、幕府側からすれば、それら公儀の役人人事の掌握が貞享期の朝幕関係の焦点になったと考えられる。

また土屋は、議奏から「御勝手向御賄等之御用」を担当する人材を選び、禁裏附等と相談して支出削減を行う意向を示していたが、この点は必ずしも実現したようには思えない。ただし、禁裏附を通して、禁裏の支出増を抑え大幅な節約を指示し、その政策が朝廷内に浸透していたことが確認できる。<sup>354</sup>元禄期には、勧修寺経慶や中御門資熙らが議奏職に就き朝廷内で強い権限をもつに至ったが、これは貞享期の幕府の対朝廷政策との関連を考える必要があるかもしれない。<sup>355</sup>

土屋は所司代から老中に転任しても、なお朝幕間において役割を果たす存在と認識されていたことが明らかになったが、いわゆる朝幕協調の路線が続く一方で、土屋のとった朝廷統制の政策の路線は、少なくとも、土屋が老中に在任した享保初年までは継続したのではないかと考えられるが、この点については今後の課題としたい。<sup>356</sup>

注

- (1) 山口和夫「近世天皇・朝廷研究の軌跡と課題」(『講座・前近代の天皇 第五巻』青木書店、一九九五年)。
- (2) 三上参次『尊皇論発達史』(富山房、一九四一年)や辻善之助「江戸時代開幕関係」(『日本文化史V』春秋社、一九五〇年)など。
- (3) 「貞享度大嘗會の再興について」(『書陵部紀要』四号、一九五四年)。
- (4) 三上氏前掲『尊皇論発達史』八四頁。
- (5) 久保貴子「近世の朝廷運営」(岩田書院、一九九八年)二七・二八頁。
- (6) 高埜利彦『日本の歴史13 元禄・享保期の時代』(集英社、一九九二年)一六〇～一六三頁。
- (7) 拙稿「近世開幕関係史の一視点」寛文・元禄期の公家処罰を中心に」(『人民の歴史学』一三〇号、一九九六年)。
- (8) 近衛基熙は「此事近來出来、納言以下既及廿人蟄居、末世之弊不便」と、その日記に記している(『基熙公記』天和四年正月二一日条、東京大学史料編纂所蔵)。
- (9) 『基量卿記』貞享四年正月十四日条(宮内庁書陵部所蔵)。
- (10) 『基量卿記』貞享四年正月十六日条。
- (11) 『徳川將軍政治権力の研究』(吉川弘文館、一九九一年)。
- (12) 拙稿「江戸時代近習公家衆について」(『東京学芸大学附属高等学校大泉校舎 研究紀要』一五集、一九九〇年)、同「江戸時代議奏制の成立について」(『史海』三四号、一九八七年)、同「寛文三年『禁裏御所御定目』について」(『東京学芸大学附属高等学校大泉校舎 研究紀要』一四集、一九八九年)。
- (13) 平井誠二「確立期の議奏」(『中央大学文学部紀要』三三三号、一九八八年)、前掲注(5)久保「近世の朝廷運営」、山口和夫「天皇・院と公家集団」(『歴史学研究』七一六号、一九九八年)、村和明「近世仙洞機構の成立過程について」(『史学雑誌』一一七編三二、二〇〇八年)など。
- (14) 『兼輝公記』天和三年一月一七日条(東京大学史料編纂所蔵)。
- (15) 『兼輝公記』天和二年六月二二日条。『基熙公記』天和二年三月二六日条には、武家伝奏花山院定誠・千種有能、天皇の近臣難波宗量ら

が「傳臣」と呼ばれ、記録されている。

- (16) 『方長卿記』天和三年九月十一日条(内閣文庫所蔵)は、七月二九日付稲葉宛て堀田の書状を記載している(ほかの二条は「一春 宮御所之義、禁裏御作法ニ准し、諸事輕被仰付御尤之事、一摂家・宮門跡を始、執奏之義無用ニ候、関白殿并両伝奏江彼相達之上、可被及 叡聞候、尤寺社等之伝 奏茂、其筋々之儀、是又両伝奏江、被遂相談言上可然事」)。
- (17) こうした幕府の政策は、寛文・延宝期に朝廷内で後水尾法皇を中心に制定された法度ともリンクしている(拙稿「禁中並公家諸法度の機能に関する一考察」『日本歴史』五七一号、一九九五年)。
- (18) 『通誠公記』第一、貞享元年一月一六日条(続群書類従完成会)。
- (19) 拙稿「京都所司代就任時の勤方心得とその変容」(『日本歴史』七三五号、二〇〇九年)。
- (20) 山口和夫「近世史料と政治史研究」(『日本の時代史30』吉川弘文館、二〇〇四年)。
- (21) 「老中御書附(勤方心得)」(国文学研究資料館所蔵、常陸国土浦土屋家文書七七三)。
- (22) 『通誠公記』第一、貞享二年一月七・一二日条。
- (23) 『通誠公記』第一、貞享二年二月一日条。
- (24) 江戸後期の随筆「翁草」には、所司代土屋政直が行った禁中の風俗統制に関連する記事が記されている(吉川弘文館刊『日本随筆大成 第三期』二一、一五一～一五二頁)。
- (25) 前掲注(12)拙稿「江戸時代議奏制の成立について」。
- (26) 『基量卿記』貞享三年六月六日条。
- (27) 常陸国土浦土屋家文書、二九D函五五三三号。
- (28) 長谷川裕子「元禄期の側用人と勝手掛若年寄」(『幕府制度史の研究』吉川弘文館、一九八三年)。
- (29) 福留真紀「徳川將軍側近の研究」(校倉書房、二〇〇六年)。
- (30) 前掲注(13)平井「確立期の議奏」。
- (31) 『中院通茂日記』寛文二年五月二一日条(東京大学史料編纂所蔵)。
- (32) 『中院通茂日記』延宝三年閏四月二七日条。
- (33) 『中院通茂日記』延宝三年六月二六日条。

- (34) 前掲注(12) 拙稿「江戸時代近習公家衆について」。
- (35) 野村玄『日本近世国家の確立と天皇』(清文堂出版、二〇〇六年)は、「寛文期の『叡慮』を問題とし、寛文九年靈元天皇が三条西実条を排斥しようとする「叡慮の独走」を「幕府への挑戦」ととらえ、幕府が『叡慮』の制御を試み、寛文期以降も天皇の意思表明をどう抑制していくかが課題となったことを述べている。確かに、天皇の意志を幕府の政策にどう調整していくかという問題は、まさに貞享期において朝幕間の大きな問題となったが、後水尾法皇の生存する寛文期において、朝幕対立構造における「叡慮」を設定し、誇大にとらえることはいかなるものであろうか。野村氏が分析した『中院通茂自筆記』の解釈や、天皇のわずか一六歳という年齢からしても、寛文期において「幕府への挑戦」というとらえ方は誇大すぎるものと考えられ、幕府と朝廷が互いに希望する天皇像に照らして、天皇にその修正が求められたと考える必要がある。
- (36) 『基量卿記』貞享三年十二月三日条に関連記事がある。
- (37) 『泰福卿記』貞享四年正月三日条(宮内庁書陵部所蔵)には、「此四人ハ、たとひ遠島へ遷幸有とも、御供可仕之由、以一封之連判申上ル、依之四人へ勅書、是又一封二拝領難有、文言等也、則有栖川宮之御方ニ而留置之、依之宮へ密々之御用有之、今夜勅書被下之、且又内府へ之御内勅有之候也」と記され、天皇と四人は強固な契約を結んでいたことがわかる。
- (38) 『基量卿記』貞享四年正月二日・四日条。
- (39) 一方、東園基量は、一条兼輝の摂政就任が一条と京都所司代との昵懇による計らいではないかとの疑念をもち、一条に詰め寄っている(『基量卿記』貞享三年十一月三日条)。
- (40) 前掲注(13)。
- (41) 『勸慶日記』貞享四年一〇月四日条(勸修寺家旧蔵記録、東京大学史料編纂所蔵)。
- (42) 東山天皇に付けられた「四人衆」は、元禄二年六月二八日にはその任を解かれ、「四人衆」(当時は正親町が明正上皇附となり「三人衆」は期待された議奏補佐の任が機能しなかった(「三人衆之内、内々者議奏之佐二もと被仰出候へ共、不能其儀候間、自今被止……:明

- 日)限宜間、可被仰出」『勸慶日記』同月二七日条)。
- (43) 勸修寺経慶は、役料支給を拒んでいたが、結局、靈元上皇の計らいで内証として銀一〇枚を拝領し(『勸慶日記』貞享四年七月二二日条、元禄元年七月二二日条)、元禄二年六月以後は役料が再び支給された(『勸慶日記』元禄元年六月一三日条)。
- (44) 『勸慶日記』貞享四年一〇月二八日条。
- (45) 『方長卿記』貞享四年一月二六日条。
- (46) 『勸慶日記』元禄二年四月二九日条。
- (47) 前掲注(13) 平井「確立期の議奏」前掲注(5) 久保「近世の朝廷運営」。
- (48) 『資廉卿記』元禄五年二月四日条(東京大学史料編纂所蔵)。
- (49) 『基熙公記』元禄六年八月一七日条。
- (50) 『基熙公記』元禄六年八月一八日条。
- (51) 『勸慶日記』元禄六年八月一六日条。
- (52) 平井誠二「武家伝奏の補任について」(『日本歴史』二四四、一九八三年)は、元禄期以降、「幕府は、基本的な候補者の人選を朝廷に任せてしまった」と指摘するが、この評価は一面的であり、幕府が内慮伺いの手続きを通して、人事権を握っていたと評価すべきではないかと考える。
- (53) 山口和夫「朝廷と公家社会」『日本史講座6 近世社会論』(東京大学出版会、二〇〇五年)。
- (54) 『勸慶日記』貞享四年五月一日・一〇月一三日条。
- (55) 石田舜「元禄期の朝幕関係と綱吉政権」(『日本歴史』七二五号、二〇〇八年)は、幕府が「資熙の『執権』による『叡慮』制御に期待をかけた」と述べており、議奏職という面からは当然ともいえるが、石田氏のいう「叡慮」制御というものが、東山天皇「御静謐」という認識の下、朝幕間で何か特別な意味を持っていたかが不明である。中御門の「執権」が否定されなかったことは、中御門を支持した武家伝奏正親町公通が、柳沢吉保側室の異母兄に当たることからも考えるべきではないだろうか。また、石田氏は「幕府も、関白を中心とした運営のみを志向するのではなく」内証のルートが機能したことを指摘し、この動向が「時代の雰囲気濃厚に映し出したもの」と述べるが、右の指摘が前時代に比していかなる朝幕関係の

あり方や朝廷内制度の変容をあらわすか、また三上参次『尊皇論発達史』の研究とどのように向き合うか、説明が必要ではないかと考える。

(56) 正徳四年(一七一四)、新所司代の水野忠之に対して、土屋政直ら老中から出された一通の勤方心得全二三条(『正徳新令』、国立公文書館内閣文庫所蔵)が出されている。そのうちの二条目には、禁中のみならず院中の「御作法」まで朝廷内の諸事を掌握することが示され、禁裏附の厳重な監督とともに、朝廷内の動向の変化に絶えず精通し、「御所方御定式」とは異なる事態が起きた時にすぐに察知できるようにすること、公家の中に行跡宜しくない者がいて改善されない者は江戸まで連絡すること、などの心得書が記されており、將軍綱吉、さらには土屋の対朝廷政策の一端が位置付き、政直が受け取った貞享期の勤方心得に比して、その細かな規定が加わったことがわかる。そして、享保二(一七一七)年、松平忠周の就任に当たったの勤め方心得では、この二か条の内容が削除または変更されたのである(前掲注(19))。